

序章

神戸学院大学では、現在からさかのぼること約 20 年前、1992（平成 4）年 5 月に自己点検評価制度委員会規程を制定し、自己点検・評価を司る全学組織として学長を議長とする自己点検評価制度委員会を発足させた。この委員会のもとに専門の四つの小委員会（教育活動小委員会、学生援助活動小委員会、研究活動小委員会、大学院小委員会）を設け、各学部長、各部局長および各小委員会の座長をもって自己点検作業部会の構成メンバーとした。

この委員会成立以来、本学は着実に継続的な自己点検活動を行ってきた。まず、1993（平成 5）年 9 月には、将来計画を展望しながら、その時点での全学的、総括的な考え方を中間取りまとめとして全学の教職員に配布し、その上で本学の全構成員や各機関の自主的・自律的な現状を点検・評価し、「神戸学院大学の現状と課題」（1995（平成 7）年 3 月 31 日発行）を大学として取りまとめた。

1996 年には、大学基準協会による全国国公立大学約 200 大学（維持会員大学）間での相互評価の制度が発足し、相互評価の申し込みを 1996（平成 8）年 8 月 31 日付で行い、1997（平成 9）年 4 月 1 日付をもって本制度発足第 1 回の相互評価の結果が公表され、「大学基準」に適合している全国 22 大学の一つとして認定大学という評価結果を頂戴した。このときの相互評価用調書の大要と大学基準協会からの相互評価結果を併せて、第 2 号「神戸学院大学の現状と課題」として公表した。

2004（平成 16）年学校教育法第 69 条の 3 第 2 項に基づく、国公立すべての大学が教育研究等の状況について定期的に、文部科学大臣から認証を受けた第三者評価機関（認証評価機関）から評価を受けなければならない認証評価制度（第 1 回）が実施されることに伴い、認証評価機関である大学基準協会に 2004（平成 16）年度に相互評価申請ならびに認証評価を申し込み、2005（平成 17）年 3 月に「本協会の大学基準に適合している」ことの認定を受け、前回と同じように点検・評価報告書等の大要と大学基準協会から頂戴した相互評価結果ならびに認証評価結果を併せて第 3 号「神戸学院大学の現状と課題」として公表を行った。

この 2004（平成 16）年度の相互評価に際しては、認定は頂戴したものの、69 項目の問題点の指摘に関する助言、勧告としての 1 項目の改善報告が求められた。この助言と勧告を受け、自己点検評価制度委員会の下に設けられた自己点検作業部会の指揮のもと、各該当部局において助言と勧告への検討を行い、2008（平成 20）年 7 月 28 日にいわゆる「改善報告書」を大学基準協会に提出し、2009（平成 21）年 3 月 13 日付で大学基準協会より「今回提出された改善報告書からは、貴大学が、これらの助言・勧告を真摯に受け止め、意欲的に改善に取り組んでいることを確認できる。また、多くの項目についてその成果も満足すべきものである。」との「改善報告書検討結果（神戸学院大学）」を頂戴したところである。

とはいえ、「改善報告書検討結果（神戸学院大学）」では、一部学部における履修制限、一部研究科における教育・研究指導体制、大学院定員管理について指摘があり、また財務的には寄付金比率、補助金比率の改善努力を求められた。これらの点については、当該部局において検討を重ねているところでもある。

こうした中、新しい認証評価システムとなった 2011（平成 23）年度認証評価に、再び

評価申請を行うこととなった。改善報告書提出後2年余は経っているが、新しい認証評価システム及びその形式の全貌がおよそ明らかになったのは、2009（平成21）年10月の説明会においてであり、そのシステムと形式の理解にやや時間を割かれたことは正直にお伝え申し上げたい。

大学内部に自己点検評価のための委員会組織は当然にして常設されているが、報告書作成には、その構成委員のみならず、各部局・部署の委員以外の教職員も加わっている。そうした委員以外のいわば執筆者レベルでの新しい認証評価のシステムと形式に対する理解がなければ、十分な報告書作成は困難だったのであり、その理解を求めることに相当のエネルギーを注入する必要があったのは事実である。

しかし、このような事情がありながらも、新たなシステムと形式の理解過程も含めて、この報告書作成の過程は、我々にとって十分意義あるものであったことも同時にお伝えしたい。とくに、本学及び法人においては、現在いわゆる「中長期計画」の策定に取り組もうとしている。この点検・評価報告書作成は「中長期計画」策定に関する検討・議論点の整理として大いに有効であっただけでなく、まさにその土台を築く一環として位置づけることができた。この点に関しては、大学基準協会に心より感謝を申し上げます。

本報告書は、まさに神戸学院大学の現状とその課題を表現しているものと考えている。不十分な点も正直に記載されている箇所もあるが、欠点のない完璧な組織は存在しないのであり、常に反省と課題に直面しているのが大学を含めた組織というものであろう。そうした点も含めて、神戸学院大学の現状をご判断いただき、評価をお願いするところである。